

中部の

エネルギーを 築いた

人々

“わが人生は闘争なり”の松永安左工門

— その7(最終回)：松永安左工門ゆかりの地 —

松永安左工門は、昨年6回にわたり掲載してきたように明治・大正・昭和を通じて卓越した先見性と果敢な決断力で、日本電力業界の発展に極めて重要な役割を果たした人物である。

最終回にあたり九州から関東まで全国に亘る足跡を紹介する。

壱岐松永記念館(所在地：長崎県壱岐市)

松永安左工門は、幼名亀之助。1875(明治8)年12月1日、長崎県壱岐市石田町印通寺の商家に生まれた。この生家跡に1971(昭和46)年6月26日、郷土の偉人を記念し、その大なる功績を世の人々に伝えるため記念館が建設された。

「壱岐松永記念館」と書かれた青銅鑄物の表札を右に見て石畳に入ると、右側が生家、その隣に福岡市内を走っていた路面電車、正面には松永安左工門の胸像がある。広場全面に敷き詰められた荒い石畳は、玄界灘の荒波と波乱に富んだ松永翁の人生を象徴している。ホール of 玄関に接して庭の中央に棧橋が突き

出ている。この棧橋の先端に立つと松永翁がかつて青雲の志を抱いて郷里を出立した気概が想像される。広場北側中央にある松永翁と一子夫人の胸像は、長崎の「平和祈念像」を製作した北村西望の手によるものである。



壱岐松永記念館



生家と中の間

松永耳庵の茶室

60歳に始めた茶の湯で耳庵の号を持ち、鈍翁・益田孝、三溪・原富太郎と共に近代数奇の「三代茶人」と呼ばれた。

この内容は、平成24年5月号に掲載されているものもあるので簡単に紹介する。

(1) 白雲洞茶苑

神奈川県足柄下郡箱根町・強羅公園内の茶室。

(2) 一日庵

静岡県西伊豆町堂ヶ島の別荘。彦岐生まれの松永は海をこよなく愛し、80歳を超えても入江で400m程度泳いだという。

(3) 老櫓荘、時雨庵

神奈川県小田原市にある松永の居宅に、ケヤキの大木に因んで名づけられた茶室。

(4) 斜月亭、久木庵

埼玉県所沢市の柳瀬山荘にある茶室。

(5) 春草榭

東京国立博物館の庭園にあり、柳瀬山荘から移築した茶室。

(6) 睡足軒

埼玉県新座市平林寺境内にある茶室。

(7) 八勝館

名古屋市昭和区にあり、松永が名古屋での定宿にしていた老舗の料亭。松永と初代経営者杉浦保嘉は茶を楽しむ中で、「はつしくれ さむくはあれど 茶のうまさ」の俳句に、杉浦が竹ぼうきの絵を描いた。これらの掛け軸が40幅ほどあるという。

松永コレクション

松永は、戦時中、埼玉県所沢市柳瀬に山荘を営み茶の湯三昧の生活を送っていた。1946(昭和21)年、小田原市に居を移した時に柳瀬山荘の家・土地・美術品を東京国立博物館に寄贈した。

その後も、新たに国宝に指定されている釈迦金棺出現図のほかに、重要文化財、重要美術品に指定されている美術品の収集に努め、1959(昭和34)年、これらの保護を目的として邸内に「財団法人松永記念館」を設立、収集品を公開展示してきた。

しかし、松永没後の1979(昭和54)年に財団は解散され、翌年、福岡市美術館をはじめとするいくつかの公共施設に寄贈された。

(1) 京都国立博物館

京都市東山区にある京都国立博物館に国宝「釈迦金棺出現図」が所蔵されている。

(2) 福岡市美術館

福岡市中央区大濠公園内にある福岡市美術館「松永記念館室」に、重要文化財20点を含む371点のコレクションが随時展示されている。

(寺澤 安正)